

ジョン・ダン その生涯と精神と芸術

7. 死 (翻訳)

その1

Translation of John Carey: *JOHN DONNE Life, Mind and Art*

7. Death

Part 1

後藤 廣文

Hirofumi GOTOH

死にゆく動物には
恐怖も希望もない。
人間は死に際して
すべてに恐怖と希望を抱く…
死を創ったのは人間なのだ。¹⁾

死は人間が創り出したものなので、多種多様で無限である。個々人が死の観念を創り出だし、創り出だした死の具体像はその人の想像の範囲と想像を組み立てる力を映し出すことになる。それは動物のように話したり考えたりすることができるようになる前の赤子を除いて誰もが避けることのできない創造的な活動なのである。ダンはウェブスターやその他のジェイムズ I 世時代の人たちと共に「死に大いにとりつかれた」²⁾ ことで有名であるが、死の見方は特別で当時流行していた死神の多くにはほとんどあるいは全くといっていいほど魅力を感じなかった。例えば、ワールド・チャンピオンとしての死、この死神像は古くは古代ギリシャ・ローマ時代にさかのぼるものでウォルター・ローリーが『世界史』の一節で賞賛したものだが、に熱中することはなかった。

嗚呼、雄弁で、公正で、強い死よ！ 誰も忠告できない者。そう汝が信じ込ませた。誰も恐れてしなかったことを汝はなした。世界中の人々が汝に媚びたが、汝はそれを投げ捨て、蔑んだ。どこまでも広がる雄大なこの世の全てを、人間の誇りを、残酷さを、野望を全てまとめて「ここに眠れり」というこの簡潔な言葉で表した。³⁾

この賛辞は素晴らしいけれど、もちろん馬鹿げている。呼びかける相手が存在しないからである。しかし、人間とは自分よりうまくやっている者はやがて懲らしめられるのだと思いたくなるものなのだが、しかしうまくやりたいと思うようになると人気のあるヒーローならどんな物でも、たとえ死神であろうと捕まえたいくなるものである。ローリーの死神は一七世紀には広く想像されていたもので、現在にも残っている。

一方ダンはむしろ死はたいしたことではないという考えを好んだ。ダンのソネットがほぼローリーへの答えになっているといえるかもしれない。

死よ、思い上がるな。お前は強くて、恐ろしい
 という人がいるが、そうではない。
 お前が倒したと思っている人は死んではいないのだ。
 哀れな死よ。お前はこの私も殺すことはできない。
 休息と眠りはお前の仮の姿でしかないが、多くの楽しみが
 そこから生まれる。お前からはもっとたくさん生まれるはずだ。
 最も優れた者が最も早くお前と共に去る。
 彼らの骨を休め、魂を開放するためである。
 お前は運命や偶然や王や絶望した者の奴隷だ。
 また、毒や戦争や病気と生活を共にしている。
 芥子や呪文でもお前同様眠らせてくれる。いや
 お前の一撃よりも眠らせてくれる。それなのにどうして威張るのか？
 短い眠りが過ぎると、永遠にめざめることになる。
 もう死が訪れることはない。死よお前が死ぬのだ。⁴⁾

論拠の弱いことがこの詩の長所の一つである。話者の内面の混乱を写し出すかのように、様々な理由が雑然と転げるようにして出てくる。話者が自分自身を納得させようとしているのは明らかであり、首尾よく進めているとはとてもいえないので、眠りが死よりよいといおうとしているのか、それともその逆をいおうとしているのか、自分でもきめかねているのである。まず、根拠が希薄であるが、死は眠りよりよい「はず」だといい、次に眠りは死よりよいとする。しかし、このソネットの仕上げの最後の四語が実際にはこの詩をぐらつかせるのである。始めでは死は恐れるものではないといっているのが最後で死を脅すものとして使えば（「お前が死ぬのだ」）矛盾することになり、おかしい。素晴らしい劇的な結論をしっかりと持っているのに、自分で作った罠にまっすぐ飛び込むのである。詩中の様々な理由が話者の基本的な恐怖にほとんど影響を与えていないのでこの最後の四語はこれまでの話者の言動を台無しにしているが、詩はよくなっている。また、自信ありげな先行する数行のこじつけを読む必要がなくなる。

このソネットで、冒頭行に急に持ち出された死をうまくわい小化し信じないようにしているが死の不安がほのめかされている。しかし、このソネットがなくてもダンが死の不安を抱いていることを知っておくべきである。というのは「父なる神への賛歌」で死の不安を直接言い表しているからだ。

最後の糸を紡いでしまった時には此岸で
 死に絶えるのではないかと恐れる罪を持っている。⁵⁾

死んだら全ては停止すると信じるのは、どんなに信仰の篤い人でも死が訪れないということはないという事実と同様に確かなことである。おそらく聖職者がそういうことはないと勧告しても、大半の人たちがずっと抱いてきた根本的に絶望的な憶測であっただろう。ダンと同時代人に熱心に読まれた死に関するこういった考えを提唱したのはセネカで、セネカは喘息を繰り返す間に死は何でもないとだも明るく大胆に考えて自分を慰めたものだと語っている。死ぬことは生まれなかったことと全く同じことだと自分に言い聞かせるのである。「死はただ存在しないだけのことだ。これがどういうことなのかわかっていて、生まれる前と死んだ後は同じだ。」⁶⁾ この見解に対する反応はその人が自己中心のかそれともそうではないかに大きく関わるのである。その人自身のアイデンティティの消滅を考えられないできごとあるいは悲しむべきできごとと考えるためには相当自己中心的になっていなければならない。ダンの自我は既に見たように活発に働いているのだが、自我が戦わなければならない絶えざる自己の解体感によって一層活発であったのだ。従って、セネカが冷静に見ている壊滅の予想はダンにとってはとても受け容れられないものであった。死について書いている時の彼の目的は死を生よりも一層活発で積極的なものとするものであったので、死を暗示するものを否定することであった。

事実「死よ思い上がるな」の中の議論がまやかしである理由の一つは休息（「休息と眠り」）を死と同一のものとしていることである。死を強調するのは最もダンらしくないことだからである。死は眠りであるという穏やかな作り話は広く同時代人に訴える力があり、全く医学が発達していなかった時代のいわば国民健康保健を代用するような語で、死は眠りであるという語句は決まり文句になっていた。中でもマクベスは厭世的な口調で次のように述べる。

ダンカンは今墓の中

生きる不安の発作もなく、安らかに眠っている。
反逆の嵐も峠を越えて、斬り合いも、毒殺もなく、
国内の殺し合いも、外国への出兵もなく、もう何も
彼に触れることはできない。

事実伝統的キリスト教では死者の魂は墓に留まることはなく直ぐに永遠の処罰を受けるか報酬を受けけるものと教えられていた。ディヴィーズとラザラスに関するキリストの話がその証拠として採られたのである。つまり、ラザラスが自分は天使によってアブラハムの胸に運ばれ、ディヴィーズがもう地獄に落とされているのを見ているのである。従って、死に休息はないのであるがキリスト教詩人は意図的に記憶喪失のふりをしたのであった。休息がないからといって彼らが空想にふけるのをやめたわけでもなかった。直感的にふさわしいと思った方がキリスト教の専門性より優れるのである。

しかし、これにはダンには魅力を感じなかった。誰もが使う麻酔薬は望まなかった。静かに忘却の彼方へという考え方はさけたのである。同様のことを友人のヘンリー・グッディアー宛ての手紙で語っている。

死によって眠らされたくはない。死にとらえられ私が死んだといわれるのではなく、私が勝ち、圧倒させて欲しい。難破しなければならないのなら、海であって欲しい。私の無力さの多少なりとも言い訳になるかもしれないから。流れののろい雑草の茂る湖はいやだ。泳げるほどに練習していないからだ。⁷⁾

こんな風に想像されて死は運動能力を発揮させるようにと力づける機会となり、エネルギーを集中させてくれるので申し分のない臨終のドラマや苦闘に惹かれるのである。そうでなければ死は死ぬ価値のあるものとはならないであろう。ダンにとって死は悲しみではなくて挑戦すべきものであるし、そのために彼の死のイメージは一般的なそれとは区別されるのである。ダンにとって死は決して悲しいものではなく、また、単なる悲しみでもない。ヴィクトリア時代や我々の時代の人々によって発展させられたようには葬送の調べを書くことはできなかった。沈黙が礼儀正しい葬送だなんて上品ぶっているだけ、あきらめの鼻歌は臆病者のすることとダンは思っていたことであろう。友人ジョージ・ハーバートの母親でダンヴァース卿夫人の追悼説教で会衆にわざわざ今ダンヴァース卿夫人の亡骸に何が起きているかを話している。「今あの方の身体は、あの方の身体は…今私が話している間に、くずれかけこなごなになり、少しづつちりになっています。もはや生命はないのに動いているのです。」⁸⁾ 追悼の説教の間にダンヴァース卿夫人が動いていること、事実微片となっていくのだから会衆の中でも最も動いているというダンの機知の逆説は親族が黙想したいと思うようなことではないことは想像できる。しかし、ダンはあえてしたのである。彼にとってこの説教は死を生き生きとしたものにし、死を単純な動きのない死から解放することになるのでダンヴァース卿夫人が眠っているというふりをするよりはずっと魅力的だからである。

ダンの恋愛詩には他の詩人同様に人を衰弱させるような死が侵入している。『歌とソネット』四四編中三二編に——優に半数を超える——それぞれにふさわしい死が見られる。ダンが死ぬか、相手の女性が死ぬか、あるいは二人ともが死ぬ。女性に別れを告げる時には、グッディアー宛ての手紙に書いていることだが、彼を飲み込もうと待っている死の海を感じている。他の詩では亡霊であったり、解剖標本であったり、発掘された死体であったりする。注目すべきことは死んではいるけれど非常に行動力があり強い影響力を持っていることである。実際人を苦しめることが死の現実の一つだが、ダンはそれをしっかり理解できなかったようだ。それは彼がキリスト教詩人で永遠の存在を信じていたからということだけではない。既に見たように、永遠の存在を信じている他のキリスト教詩人も死は安らかな眠りであるかのように書くことはできたし、事実書かれることも多かったのである。一方、死はダンと共に歩き回り、ダンは死と話すのである。「形見」で語られているように詩中の二人がしばしば死を繰り返すのである。

この前死んだ時には、いとしい人よ、
君と別れる度に僕は死ぬのだが…

こんな風に死が生に詰め込まれていない時でもダンは死んでも尚自分が意識の中心にいて、生きて

いる時以上に重要であり、影響力があると想像するのである。生きている人々が死んだ彼に祈りを捧げ、本物の愛を彼から学ぼうとする。「毒気」にあるように彼の解剖された死体が生きている人々に悪影響を及ぼし、彼らを流行病のように破壊する。

僕が死んで、医者にもその原因がわからず、
不審に思った僕の友人が
僕の死体を一つ一つ解剖すると
僕の心臓の中に君の絵姿を見るはずだ。
急に愛の毒が立ち昇り
友達感覚に入り込んで
僕のように彼らも死に、君の殺人罪は
大虐殺がふさわしいと君は思う。⁹⁾

ダンが試みているのは絶えず死を生の一つの形として扱う、あるいは、生に関する詩で死に活発な役割を与えて死に生命を与えようとすることである。このように詩で我々が感じることは死ねばただ忘れ去られ、他の人々はこれまで通りの生活を送るという考えを生むのではないかということに恐れることである。忘れ去られるのは自己が抹消されることなのでこんな利己心のない自己放棄は受け入れられないのである。一方ダンは自分が死んだら滅びるのは自分ではなく世界だという自己中心的な妄想を抱く。「遺言」には「死んでこの世を滅ぼそう」¹⁰⁾と書かれている。

ダンの宗教詩に見られる死は恋愛詩よりずっとはっきり表されており数も多い。彼にとって神を考えることは死を考えることである。彼を神に導くのは死だけなのであろう。依然として生きている間に神を共にあるものとして慈しむ感覚は、ジョージ・ハーバートは持てたが、ダンには異質なものであった。彼の神は死の王国に住み、神の崇拜は必然的に死の崇拜を伴うことになる。死を渴望するのは死が不安を解消してくれるからである。つまり、死ぬことによって初めて自分が救済されるかがわかるからである。最後の審判におびえながらも自分の救済を知りたくてじっとしてられないのだ。

円い地球の想像上の四隅で、トランペットを
吹いてくれ、天使たちよ…¹¹⁾

死は明確であり、生は迷いである。死はまた重大な局面でもあるので魅了されるのである。俗なる詩であれ聖なる詩であれ死を挿入することで自己劇化するのに必要な緊急性や重大性を創り出すのに役立つのである。死に嫉妬しながら例によってダンは人類史上もっとも重大な死の局面に入り込んで死に命令したがるのである。

顔につばを吐いてくれ、ユダヤ人たちよ、わき腹を刺し、

私をたたき、あざけり、むち打ち、そしてはりつけにしてくれ…¹²⁾

死が自分に注目して欲しいと願う相手として使われている。ダンが永遠との瀬戸際にいる、あるいはダンがそう言うので我々の心がひきつけられるのである。

ああ、私の黒い魂よ！今お前は召喚されたのだ
死の命令で、その戦士である、あの病気によって…

あるいは、

これが私の劇の最終場面。ここに天は私の巡礼の旅の最後の歩みを定めたのである。私の一生は無為の内にあつという間に過ぎ、後一步を残すのみ。短い最後の一寸、私の短い最後の一秒…¹³⁾

十階の窓の引っ張りに立ってふらふらする男の言葉のように、これが話者の最後の声だと繰り返して我々の注意を強制するのである。

それでもダンは死を生終わりのという考えを拒否している。死は生よりずっとダイナミックで華やかだというのが彼の見方である。死はまた、様々な好奇心を引き起こすものである。そのために死は恐怖の部屋あるいは何か特別で風変わりな知識の宝庫のようで、生き生きとし、またそのために興味を起こさせるのでダンは死について考えるのを好んだ。「人を殺したことがないものはまれだ。」「ビンや櫛や抜けた髪の毛が瘡痕を引き起こし、人を殺したことがある。」¹⁴⁾と『危篤時における信仰』の中で楽しそうに述べている。人は笑い過ぎて死ぬことがあるということは長く知られていることだとも付け加えている。初期の詩では胸に不治の膿んだ腫れもののができた男が突然それを破ることができて喜んでるのが描かれている。自分で処理して治ったと思って喜んでると緩んだ膜に包まれた病巣が喉に上がって窒息した¹⁵⁾ことを想像しながらぞっとするほど詳しく描いて、何でもないものが人を殺すということに現実感を持たせている。特に挽歌や葬送歌のような詩が死後の人々のすばらしい冒険談を創り出している。彼等はめまいを起こすようなスピードで空を飛ぶ。太陽を突き抜け、地下で金となる。死は死者を解放して、魔法使いのようにその姿を一変させるのである。例えば、エレジーの中でマーカム卿夫人は死後その肉体に劇的変化が起こる。

…海の潮が汚れた海岸を洗い流し、
砂の上に刺しゅうのような模様を残してくれるように、
死の冷たい手は彼女の肉体を洗い清めてくれるのです。¹⁶⁾

奇をてらうことなく全く素朴で誰もが共感できるように本質的に異なる経験を組み合わせるダンの

鋭い連想技法を見せてくれるのはこういった葬送歌である。死体を触れた時の感覚と海岸を裸足で歩いている時感じる波形の砂地は冷たく驚くほど堅いという点で似ているのである。が、その他の点では両者の関係は遠く離れているので、断片的な様々な感覚を一つの意味のある目的にはめ込むこと、また、死に様々な新しい顔を見つけることに集中的に心を働かせることによるのみその類似性をとらえることができるのであろう。死の恐ろしい姿もダンの動きのある描写の前では形無しである。「第二周年の歌」で死刑執行直後の首を切られた人の身体に見られるけいれんに反り返る動きを具体的にしかも読者の好奇心を誘うように説明している。死刑囚の首は完全に身体から離れ、血が首や胴体からほとぼしり出るとダンは観察している。

彼の眼はまたたき、その舌は回転して、あたかも
自分の魂を招き寄せ、呼び戻そうとするものようだ。
彼は手を堅く握り、足をあげて、魂に追いつこうとし、
歩いて、彼の魂を迎えようとするかのようだ。¹⁷⁾

ダンヴァース卿夫人の身体の分解やグッディアー宛ての手紙に書かれた想像上の死との競泳と同じようにダンの想像力が死との連想に駆り立てるのは、休息というよりは活動である。死や死に向かうことは生よりずっと壮大で生き生きとしているのである。

ダンは最も活動的な死を自分に課したのである。活動的な死であってこそ死の犠牲者は自らが殺人者であることの神秘的な魅力と勝利の喜びが許されるのである。ダンの自殺志向は長きにわたった。多くの本を読み、事例史や死を理論化した書物を点検しながら、死の社会学を熱心に論じた。五番目の「パラドックス」では「全てのものは人を殺す」という主張を提言し、一六〇八年であろうと思われるが、英国では最初の自殺擁護論を出版するつもりでいた。（実際には死ぬまで発行されなかった。）それは『自殺論 自殺は自然理法に従って罪ではない、そうとしか考えられないというパラドックスあるいは命題の告白』である。ダンの学問的で几帳面な調査はキリスト教社会誕生以前と以降の自殺、動物社会の自殺に及んでいる。そして、自殺を求めるのは普遍的な現象であると結論づけている。「いかなる時代においても、いかなる場所においても、いかなる場合においても、どんな状況にあっても人間は死にさらされており、死の想いにとらわれてきたのだ。」序文で人はつまらないことを自殺の言い訳にするもので、そんなつまらないことを理由にして自殺を試みた高貴な人を例にあげて説明するために、同時代の有名な神学者セオドー・ビーザのケースを引用し、それから自分自身の告白に飛ぶ。

ビーザは…頭がふけまみれになっただけで苦しみ、パリのミラーズ橋から投身したことがあり、偶然伯父がここを通りかからなかったら溺れていた。私もこのようなことをしたくなるという病的な気持ちをよく抱くことがある。抑圧され悩める宗派の人達に最初に育てられその人達と交際があったので死を嫌悪し、殉教を激しく想うのに慣れていたのであろうか。あ

るいは、どこにでもいる悪魔に、彼が入らないように鍵をかけたつもりだったがしっかりと閉まっていなくて、心の中への入り口の戸を見つけられたからであろうか。それとも、教義そのものに混乱するようなことやあいまいな点があるからだろうか。それとも、良心が神の贈物に反抗するような不平を言っていないと終始私に約束するからだろうか。それとも、こういったことを考えている時に罪深いことはないと思うからだろうか。それとも、勇敢にも軽蔑したりあるいは気の遠くなりそうなほど臆病なのでこういった考えが生まれるのだろうか。苦悩が立ち向かってくる時はいつでも、私の牢獄の鍵は私自身の手の中にあり、どんな治療法も私自身の剣ほどには早く心臓に届くものはないように思われる。¹⁸⁾

ハムレットの「生きるべきか、それとも死すべきか」のせりふのようにダンの告白は時代を象徴するものである。何世紀にもわたって伝統主義者達が是認してきたものであったが、あからさまに自殺を非難することに疑問を呈し始めている時代になっているのである。自分の喉をかき切る権利が特別に自分を解放するための目的として争うようなことには思えないかもしれないが、しかし、これがまさに十七世紀に大論争となる権威主義と個人主義との間の争いの一部と見られていたのである。ダン特有のつかみどころのない思想の中で『自殺論』に表されたダンの意識の中心を求めるとするならば、律法に対する反抗と個人的な自主性の主張である。律法主義者の「詭弁を弄する説教」を軽蔑して次のように言う。

いかなる律法もそれほど根本的でも自然なものでない。律法はその根拠となる理由を予測しているものなのである。理由が不変であることはめったになく、周囲の状況によって変わるものである。いずれにしても個々人自身が帝王なのである…良心が穏やかで冷静である人は自己を防衛する理由がなくなることを確信して、律法もまた必要がないと思う。そうでないと律法に反することをを行うかもしれない。¹⁹⁾

我々の時代と同様ダンの時代のしかるべき人ならばこの論争には確かに驚くであろう。どちらの律法に従うべきか自由に選べるということになれば社会は混乱し崩壊することになるからである。反自殺論者の主張は、権威主義者が公表したものであるが、通常自殺は市民がローマ共和制に対する責務をないがしろにすることを意味するものだという『ニコマコス倫理学』におけるアリストテレスの意見を引用して、常に国家に対する個人の義務を強調することにあつた。しかしながら、この議論は哲学者にとっては満足すべきものであつたが、完全な説得というには不十分であつた。普通自殺者は国家よりも自分の悩み方に関心があり、一つしかない生命をなくしても代わりの命をたくさん持っている国家は彼がいなくても構わないだろうと思ひそうである。

国家論が揺るぎのないものとするならば、律法をもっと説得力のあるものにする方策を取り入れなければならない。十八世紀までのキリスト教ヨーロッパでは自殺未遂者は死刑に処せられ、自殺者の死体は手足切断という公開処刑を受け、その財産は没収されるのが普通であつた。英国の自殺者は身体に棒を打ち込まれ、通りを引きずられ、共同墓地ではなく十字路に埋められるの

が慣例であった。²⁰⁾ 自殺が流行すると労働の供給が減り税収が減るから都市での自殺が気がかりなのは理解できる。しかし、これに対する教会の反対には説明しにくいものがある。現在の困難な状態から開放されるという死後の約束がキリスト教から与えられると誠実な信仰者は自殺が唯一の穏当な行為だと思えるのはもっともなことである。事実初期のキリスト教徒はこれに早くから気づいていたし、彼らの自殺熱に教会は結局取り締まりを厳しくすることになったのである。故意に殉教を求めたドナティスト派は聖アウグスチヌスに厳しく非難された。自殺は「忌まわしい、永遠に罰せられるべき罪だ」と彼は断言した。つまり、自殺は卑怯であり、六番目の戒律の破棄に当たり、神の慈悲が絶望的になることを示すことになるというのである。²¹⁾ アクィナスは聖アウグスチヌスのこのような自殺を思いとどまらせるための議論を更に詳しく説明し、自殺志願者にわかりやすいように表に整理してまとめた。²²⁾ 何世紀もの間これが教会の権威ある見解として残っている。

ダンは『自殺論』の中でこのように確立された教会の見解の無神経さを熱をこめて、時にはヒステリックなほど力をこめて攻撃した。不可解な省略があるかと思うとあからさまにあざけるようなところや、野次と機知という点では興奮して息もつけないところや、激しい哀れみの調子が見られる。教会の教義でダンを激怒させたのはその哀れみのないことと優れた知識を持つ者のもの柔らかさを装うその態度であった。自殺者が神の慈悲に絶望するのをどうやって教会は知ることができるのであろうか。自殺者は悔い改めないから永遠の罪に落とされるとどうして思い込むのであろうか。「自殺者がそばにいないから、自殺者の話を聞いたことがないから悔い改めないと推測するのは不法な権力行使である」²³⁾ とダンは抗議する。多くの自殺者は懺悔し、神の許しを求める手記を残している。彼の非難は表面上は確かにもっともなことと思える。ウォルター・ローリー卿は一六〇三年にロンドン搭で（うまくいかなかったが）身体を突き刺した時、先ず自殺者は絶望の内に死ぬのかどうかは「議論的になっている問題」だと指摘する手紙を書いている。頭部に銃を発射する前にヘイドンは日記に「神よ、お許し下さい」²⁴⁾ という最後の言葉を書いている。他方教会は自殺が本当に懺悔のつもりなら自らを殺す行為には及ばないであろうと説得させるかのように言うであろう。問題になるのは選んだ自殺の方法によって自殺に続いて後悔する時間がある場合だけである。自殺を犯した後自殺を後悔していることを述べる手記がなければならぬことになる。ダンはこういうことがへりくつだということは十分わかまえているのだが、彼が明らかにしようとしていることは誰にも他人が考えていることを決める権利はないということである。教会の厚かましい尊大な規定に対して個人の意識を防御しているのであり、これが自己の内面の複雑さに順応した詩人に我々が期待すべきものなのである。聖クレメントが言うように何度も後悔するようなことは繰り返さないことが本当に後悔しているかどうかを試すことになるのであれば、自殺が懺悔をしていると考えられるよいケースである²⁵⁾とダンは意地悪く書き加えていると確信できる。

自殺したくなるという心理状態に罪はないというだけではなく、「神がほのめかしたり、同意すれば」²⁶⁾ 自殺するかもしれないと主張するのである。サムソンの自殺というやっかいな事実を聖書注釈者はサムソンは神の命令で自殺したのだから特別のケースだと主張し、この解釈が通常世に広まっている。しかし、もしサムソンが特別だとしても何故他には誰もいないのかとダンは問いたがす。我々の理性に従って自殺を犯したとしたら、理性は人間の中にある神の声を表すという教会の

教えを受け入れるとしたら、自殺に対する神の究極的な責任は疑う余地のないもののように思われる。ダンには自殺に共感しながらキリスト教世界の歴史と伝統に対して暴動を起こすかのように審査を受けさせようとするのである。例えば、もし秘蹟を受けようと母胎の中で子供が手足を突き出しているとして、このまだ生まれていない子供に正しく洗礼できるものかどうかという大問題のような様々な聖職者達の論争に対してダンにはスターンのような嗜好を示している。あたかもキリスト教徒の殉教はキリスト誕生以前の主人の葬式に主人の妻や使用人が自殺するといったような異教徒の葬式の中に顕著な例とはいえないが非常に正確に共通する感情表現に見られるような死の願望のきわめて明白な表れでしかないかのように自慢げかつ勝手気ままに論じている。初期の自滅的ともいえる過剰な殉教の説明には奇異だが華々しい死のありように魅力を感じる気持ちと過度とも思えるほどの殉死に興奮する気持ちとが混在している。全ての殉教者が剣に身を差し出し、死刑執行人は疲労困憊してうめきをもらす。殉教に熱狂する者は殉教することが「毎日の運動」であるかのように、喜んで最初の殉教者になる。「多くの者は焼かれることによってのみ清められる。子供達は執行人を怒らせ悩ませるために執行人は火に投げられるかもしれないと教える。」²⁷⁾ 大量殺人についてダンが書いたのはただ自殺を正当化したいと思ったからというだけではない。実際のところ殉教という異様な行動はダンの議論の本質とは全く関係がないからである。殉教者達について書いたのは殉教者達は死を生以上に目立たせ、意義のあるものとすると同時に彼らの眼には死は生の終わりではなく生の始まりと映り、死をぬぐい消すことになるからである。

現代の読者にとって『自殺論』に見られるもっとも極端な主張はキリスト自身が自殺したのだということに違いない。この本の最も鋭敏な二十世紀の研究者ホーヘイ・ルイス・ビーヘイスはこの本を全体が「一見あいまいな目的」の基に書かれていると解釈している。²⁸⁾ キリストは自ら進んで殺害者に身体を引き渡したのだから「不屈の精神を持った英雄にふさわしい行為」であったとダンと言う。キリストの自殺の意図は「私は羊のために命を捨てる」というような言い方で明らかだと言う。死が意図的であったことを思わせる早さでキリストは十字架の上で死んだ。「多くの者は十字架にかけられたまま何日も生き、盗人達は更に長く生きた」とダンが言っている。アウグスティヌスも、アキナスも、もちろん自殺と言っていないけれど、キリストの意思が死の原因であることに同意している。アキナスは聖書にある磔の説明から判断してキリストはまだ十分体力があり「最後の瞬間に大きな声を出すことができたのだから」全く唐突に自分の人生を縮めたのだということを認めている。他の注釈者達はキリストは首を下げていたのであって、我々が死んだ時のようには垂れてはいなかったと言う。ダンにとってこういった学説は注目に値した。神が人間に自殺を奨励しているだけではなく、自ら自殺したのだ。更に、キリストの自殺は神にふさわしく特別に崇高で統御されたものである。人間業とは思えない安楽の内に死んだ。「魂に身体を出るようにと命ずること以外は」²⁹⁾ 何も求めなかったのである。キリストにとって死は医学的な死ではなくて、まばたきをして太陽を消滅させてそれによってダンの自我を引き寄せているのだという思いのように、意識の勝利の誇示である。『自殺論』は他の何よりダンにとっては重要なものであった。一六四七年に出版された後も一般の関心を引くことは比較的少なく、自らの命を奪うという議論に心を打たれたと思われるような人はまれであった。ケンブリッジ大学ディヴィニティ学寮の欽定講座担

任教授アンソニー・タックニーは一六五〇年代に、正確に覚えているとすれば、ダンの本によって死刑囚が毒を飲んで自殺しようとしたと言っている。モーハウフは『博学者』の中で少なからぬ自殺者がダンの影響を受けているが証拠はないと言っている。ルクレティウスの翻訳者トーマス・クリーテは自分の家の図書室でダンの初版を読みながら首吊りに使うロープを愛撫し、ついにはそれで首を吊った。しかし、ダンだけではなくルクレティウスも責めるべきであったかもしれない。³⁰⁾ この本は自殺を実行させるための誘因としては当てはずれではあったが、ダン自身は満足しており、この本を見せた友人達が論理上の欠点を見つけられなかったことを喜んでいる。両大学の学者達は一読後「確かに正しくない糸が一本あるが、簡単には見つからない」と言ったとダンは報告している。一六一九年ダンはロバート・カー卿にこの本の原稿を安全に保管してもらえるように送り、見せたことのある友達には「ドクター・ダンではなく、ジャック・ダンが書いた本」だと伝えてほしいと繰り返し願っている。しかし、若者らしく大騒ぎをしてこのように言うのはどうも本心ではないようだ。原稿を取っておきたいという強い気持ちと合わないからだ。実は戻ることができないかもしれない海外旅行に出かけることになっていたのでカー卿に送ったのである。もし、海外で死んだら『自殺論』は聖職者達の書類の中で偶然見つかる厄介なものとなったであろう。明らかに一番安全な方法は破棄することだが、そうはできなかった。カー卿にそのどちらもしないようにと頼んでいる。「生きていたら、取っておいてくれ、死んでも出版したり火の中に投ずることはしないでくれ。出版しないでくれ、かといって火の中に投じないでくれ。この二つの内あなたが望む方にしてくれ。」³¹⁾ この本は彼がこれまでたどってきた道を筋の通った（両大学での経験から判断して）反ばくの余地のない正当なものとする理由を与えてくれるので取っておきたかったのである。自分自身の良心に従ってこの本を残そうとしたのである。そうでなければ、既にダンが証明したよう、誰もが持つ自然な願いというよりは、罪深い気まぐれとして死を望んでいると思われてしまっていたかもしれないのである。原稿は、いつでも使えるような自殺に関する非凡な覚書となっている。

どうしてこれほど自殺に心を動かされたのかいくら考えてもダンにはわからなかったことはこれまで見てきたことである。更に、『自殺論』序文では、彼も認めていることだが、死への脅迫観念の強さについて全て真実をさらけ出してはいない。序文で「苦悩に襲われるといつも」死の願望にとらわれると言っているが、グッディアア宛の手紙ではどんな不幸があっても自殺を思うことはないことを明かしている。「時勢に従って、今よりずっとよい希望が持てる時には同じ願望を持った」³²⁾ と書いているのである。このようにダンが挫折した時に説明を加えようとするのは、無遠慮のようだが、そうしたくなる気持ちが抑えられないからである。フランスの偉大な社会学者エミール・デュークハイム著の自殺に関する古典的書物が、偶然、確定できる限りではあるが、ダンの精神状態に非常によく似たところをいくつか提供してくれている。³³⁾

もちろん、デュークハイムは自殺を個人の精神というよりは社会構造と関係させると説明できる現象として提示するという点に関心があるのだ。自殺の原因を社会とは関係のないところに求める学説を否定し、様々な国や文化的グループの統計値を集めたりそれらを比較することによって例えば比較的高率で自殺が起こることが確実な新教の教義（プロテスタンティズム）や合法的な離婚

のような社会的要因を分離し独立させたのである。しかし、これら社会的要因も個々人の精神にプレッシャーがかかって始めて自殺を引き起こすのだからデュークハイムの発見を心理学にかかわりを持たせることは避けられないし、社会学的な慣例を尊重して人は自殺するものだと信じかねないような印象を与えることがあるので彼の発見に惑わされてはいけない。

デュークハイムの分類した三つの自殺の内利己的自殺とアノミー的自殺の二つがダンに関連すると思われる。利己的自殺は個人と社会あるいは家族との融和不足から起きるものである。人と社会との結びつきがゆるいものだから人と生命との絆もゆるむのである。結局、利己的自殺は自己の考えだけに没頭することに原因があるのだ。

周りのものに強い嫌悪感を感じるとその人の意識は自分のことだけに集中し、意識を研究するのが唯一ふさわしいものと考え、その主たる研究対象として自己観察と自己分析を始める。…彼が愛するとしても、他人と打ち解け他人と混じりあって実を結ぶような結びつきを求めるのではなく、自分を愛することしかできないのである。³⁴⁾

これがダンの詩に適切に当てはまることや魂の最も高貴な行いは「魂そのものを内省し、熟考し、黙想すること」³⁵⁾ であるという彼の主張は論証する必要はないであろう。同様に長く追放されているという感じをダンが持っていることも明らかである。背教によって長年育てられ、支えてくれたカトリック社会から離脱したのである。また、出世することに失敗したことによって孤立し、職も得られないと感じていたのであった。自殺したくなる時があるとすぐそのことを告白する手紙をグディアーに送り、あたかも自殺願望と無職とに明らかな関係があるかのように、職がなく虚無感に襲われていることをわからせようとするのである。「何かを喜んでしたいのだが、それが何かを言えないのは驚くには当たらない。何をするか選ぶことから始めなくてはならないが、いかなる人にとっても必要とされないので無でしかない。」³⁶⁾ この言い方は過剰な利己主義の結果自殺するというデュークハイムの意見と不思議なほど結びつくものである。

自分自身以外に目的がない場合自分はこの世から消えるのだから努力しても結局は無に終わるといふ思いにとられる。しかし、虚無は恐ろしい。こういう状態にあると人は生きる勇気をなくすものだ。³⁷⁾

恋愛詩でダンと恋人が忙しい外の世界と分離していること、自己充足を繰り返し自慢しなければならないこと、この自己充足を思いわずらう時「聖列加入」や「聖遺物」に見られるような死へとさすらう彼の精神的傾向は皆デュークハイムの書く自滅的な孤独に対処する様々な方法と見ることができよう。

社会の中で自分にふさわしい場所を奪われるとデュークハイムの言うようにますます自滅的になり人は社会的な目標も奪われるのである。目標を達成しても自分以外の誰にも現実味はないし、行動してもただ無意味だというだけではなく現実感がないと感じ始めるのである。実体のない夢の中

にいるようなものだ。こういったうつろな意識はダンの作品に明らかにある。人生の喜びはただ満たされていないというだけではなく喜びそのものが実在しないとダンと言う。名誉とか楽しみというものは「ない」³⁸⁾と『神学論集』ではっきり言っている。このような否定は宗教上のゆううつさ以上に深く根ざし、その基となっているのは形而上学的なものなのである。『危篤時における信仰』の中でダンは場所と時間は存在しないと論じている。我々が物の場所として考えるものは「空気といううつろな見かけ以外の何物でもない。」変わりやすく測ることのできない空間があるだけで、そこに固定点をすえようとするのはばかげたことである。時に関しては我々は過去・現在・未来の三つに分けるが、過去と未来は存在しないし、「現在と呼ぶものも今は現在と呼び始めた時の今と同じものではない。」従って、時は場所と同じく「想像上の半ば存在しないもの」であり、これが我々の幸福感をはかるものなので、幸福も存在しないということになるのだとダンは論じる。³⁹⁾ 自らの経験の現実性に関するこういった疑いは宗教詩に見られる絶望の原因となっているものである。絶望は挫折を繰り返しながらも野望を抱き続けるダンの性格と結びついていたに違いない。成功したいという激しい欲望と成功してもたいした意味はないという自覚とが共存しなければならなかった。こういった状況では成功への熱望に貪欲になると同時に無駄だという気持ちとが並存することになる。やがては自殺するか狂気にいたることになるのだ。従って、ダンの場合その両方を受け入れてくれるから詩へと向かうのである。一方、『歌とソネット』のいくつかの詩に見られる情熱は他の詩に見られる人生の可能性への疑念と対をなすものである。愛は努力するに値しないものとダンは決意するのである。

安楽や金や名誉や生命まで

こんな空しい泡の影に捧げるのか?⁴⁰⁾

「イメージと夢」では「歓びは全て空想でしかない」、「ああ、真実の歓びはよくて夢に過ぎない」と絶望的に述べている。一瞬の愛が激しく真実のように見える時は他の全ての瞬間を犠牲にしているのであって、他の全ての瞬間は夢のようなもやに包まれてしまうのである。「この他の喜びは皆そらごと。」⁴¹⁾

こういったタイプの失意の詩はデュークハイムの言う自殺の分類の内のアノミー的自殺とつながる。アノミー状態になった人々の自殺は個人的なものである。彼らにとって人の目標や向上心に影響をもたらす組織としての社会の持つ社会的規範がいくつかの理由で機能していないからである。簡単な例として突然貧困に襲われたり、突然大金持ちになった人をあげることができる。彼らは人生の普通の目標やその見返りがなくなってしまうのである。もう一つのアノミー的自殺は一般的に離婚した人々の間に起こる。彼らは他の人たちより自殺の傾向が強いが、それは結婚することによって与えられる通常得られるものや様々な満足がなくなることによって生き抜くことができなくなるからである。明らかに到達できない目標を求める人は誰でもアノミー的自殺の危険にさらされているといえよう。デュークハイムはこういった状態を経済の分野で無制限の経済的目標を求める現代人と特に関連させているが、彼も指摘しているように、これには他にもっとたくさん明らかにすべ

きことがある。全てのアノミー的自殺を特徴づけるものは誰にでもわかる限定的な目標を失い、従って、「無制限のものを病的な程に望むこと」である。性的行動についても同様に言えることが多いとデュークハイムは見ている。アノミー的な恋人はどこでも自分の気持のおもむくままにいつでも愛情を抱く権利があると主張して、あらゆるものを熱望し満足することがない。例えば「無差別」や「否定的愛」に描かれた精神状態とこういった自殺者のタイプが似ていることは明らかであろう。これらの詩でダンが自分の望むものは明確には表現できないもので、従って、永遠に到達できないものであることを示しているのである。しかし、アノミー的自殺はこれらよりもっと広くダンの詩と関連がある。既に見たように、無限への熱望は恋愛詩だけではなく、彼の書いた全ての言葉の中にたどることができるダンの思想の特徴である。ダンはデュークハイムが明らかにしたようにアノミー的自殺症候群を非常に忠実に呈示している。「喜びを経験すると人はそれ以上の他の喜びがあるのを知りそれを求めるものだ。もし、偶然可能なことをほぼし尽くしてしまうと不可能なものを夢見、存在しないものを渴望するものである。」⁴²⁾

これは野望の芸術について見てきたことと関連するものであり、病的状況を彼の受けた教育のある特殊な条件付の特徴に求めようとする試みである。もちろん、彼の落着かない、満足することのない性質は物事を厳密に探ろうとする知力のなせる技と簡単にいうこともできる。何にでも疑問を持つ精神は疑問そのものに生命をかけ、やがて疑問に飲み込まれる。これが、デュークハイムが見つけたのだが、自殺が教育のない人達より教育や教養のある人達の間の方がずっと一般的に起こるといふ理由なのである。しかし、ダンの時代には多くの人は教育を受けることによって人生を終わらせたいという気持ちを引き起こすということを知らないで教育を受けていた。ダン特有の傾向を明らかにするにはダンの養育時のもっと独特の要因を求めなければならないし、それは特にダンが真っ先に殉教を選んだように彼を教育した人達の間にあった殉教熱と関連があることはほぼ明らかである。「私は死を嫌悪し想像上の殉教を熱望することに慣れた抑圧されて苦悩する宗派の人達に最初養育され親交を結んだ。」

ダンが自殺したがる理由としてこのようなことをあげることは一見妙かもしれないが、その方がその宗派に属したいという強い気持ちや危険の多い宣教師の責任を負いたいという気持ちを効果的に説明できると思われるからである。ダンは充分説明はしてはいないけれど、問題は明らかに初期からの養育によって生を超えた生の目的を求めることに慣らされていたことにある。従って、生が与えるいかなるものにも最終的な満足を放棄したのである。彼の努力に正しく報いる唯一のものは彼の先生達が注意を向けさせた殉教である。しかし、所属する宗教を捨てた時にこの可能性はなくなり、後に残ったものは無限で絶対的なものに対する無目的だが飽くことを知らない愛着であり、死のカトリック的意味と理論的根拠は奪われてしまったが、深く心に刻みこまれていて根絶されることはなかった死を望む気持ちである。殉教に関する度重なる苦悩は、既に初期の詩でわかっているように、ダンがノイローゼになったことに重要な原因があるといっても間違いはないであろう。彼は殉教者になり損なったのに教育者達によって死へと向けられたままの精神状態で生きなければならなかった。これは他のどの要因よりもダンの恋愛詩に見られる無情な死を理解するのに役立つであろう。また、絶えず人としての存在を破壊していくことによって生を永遠に続く死と化す宇宙

的变化に関する理論に彼が愛着を持つ理由を理解するのも役に立つであろう。

ダンはデュークハイムの分類にぴったり当てはまるのでダンが生き残ったのはほとんど稀有のことのように思われる。しかし、彼は自殺志願者ではなく自殺夢想者であったのだ。ダンをこの世に引き止めたもの何だったのかと尋ねたとしても、ここであげた様々な理由同様、憶測でしかない。とはいえダンを引き留めたものの一つとして彼の力強い自己主張があげられるようだ。周囲の状況が悪かったとしたらいとも簡単に彼は自らの命を絶っていたことは確かであろう。自殺は自己崩壊であると同時に自己肯定であるからだ。自殺すれば不運の星を振り捨て堂々と自らの運命を選ぶことになるのである。自殺はもはや犠牲ではなく勝利である。セネカを通してダンの同時代の若者達の間にも普及していたストア学派哲学はこういった自殺の見解を強調していた。『自殺論』の序で「どんな治療も私の剣ほど早く心臓に達するものはない」と不運への反応を威厳を持って語る時はセネカが語っているようなものである。伝記作者のウォルトンが描いたように最後の日々を思い通りに過ごそうとするのは死を望みのドラマに変えようとする彼の決意の表れである。説教壇で死ぬのが彼の望みであり、もう少しでその望みがかなうところであった。⁴³⁾ 一六三一年二月二五日病床から立ち上がって最後の説教を行った。あの有名な、身の毛もよだつような『死との決闘』である。死人のようなその姿は会衆に非常な驚きを与えた。「彼の涙を見、かすかでうつろな声を聞いた多くの人達はダン博士は自らの葬儀の説教をしたのだ」⁴⁴⁾ と考えたウォルトンは記録している。しかし、この説教が彼の死を招いたわけではなかった。ウォルトンの説明⁴⁵⁾を信じるとすればダンは自らの死を芸術作品にするという考えを実行に移した。大きな壺と板を買い、それから書斎で炭に火をつけているものを脱いで経帷子を着て、頭と足元をひもで結び、バランスを取るような顔つきで、そう想像されるが、壺の上に立った。何か異様な袋競争の選手のようにであった。画家が等身大の肖像画を描いている間そこにじっと立った。死人としての彼を描いたその肖像画は死後人の関心を引き留めるものを思い出させ、勇気と美術趣味を持って死に直面していることを示すために寝室に掛けられた。ついに死が迫り来るのを感じてダンは「眼を閉じた。そして両手と身体を経帷子を着せに来る人達が少しも変えなくてもいいような姿勢を取った。」⁴⁶⁾ 次第に死が迫るにつれて行ってきたことやこのような振る舞いはダンが自分の死を管理したことの証拠である。ひそかに自分の死の準備をしていたのである。こうして自殺を願いながらやっと至った死に命令を下すところまで来たのである。ダンの言う「英雄的な」キリストのような死に方や死ぬ日を自分で選んだことは明らかである。同じような自己決定的な姿勢は、例えば「別れ：嘆くのを禁じて」の冒頭に認めることができる。

有徳の人は、穏やかにこの世を去り、
その時に魂に行けとささやくように…

だから僕たちも解けて消えよう。⁴⁷⁾

ここでダンが強調していることは恋人達が自発的に別れ、自分達の運命に支配力を及ぼしそして自

分達自身が行動を起こすことである。二人の仲を引き裂いて泣き騒ぐようなことはしないで、キリストや魂を去らせる有徳の人のように今の二人の幸福を威厳を持って捨てるのである。同様に自殺に自信を持つことで「臨終」は倫理的に強くなり、たださようならをいう以上のことが起きるのである。

さあ、さあ、最後の悲しいキスもこれで終わり。
 二人の魂を吸って、二人を蒸発させるだけ。
 君の幽霊はあちらに、僕の幽霊はこちらに行く。
 最も幸福な日を夜に変えよう。
 愛し合うのに誰の許しも得ず、誰にもたよらずに。
 「行け」と言われれば、楽に死ぬる。

行け。その言葉で君が死ぬなかったら、
 僕に行けと言って、僕を死で休ませてくれ。
 もし君が死んだのなら、僕の言葉が僕にも働き、
 人殺しに当然の罰を与えることになる。
 もっともその処罰も手遅れだ。僕はもう二度死んだ、
 君と別れた時と、君に行けと言った時に。⁴⁸⁾

地下納骨堂で喜びのあまり急いでロミオを抱擁するジュリエットを思い出させる。世間を蔑んで自殺の約束をする勇気は詩そのものが与えるものである。恋人二人は自分達以外の人には見られてはいないであろう。愛において二人が比類のないものであるように、死においては自殺して初めてその所有を主張できる独自性をいつくしむことができるのである。グッディアーへの手紙の中でダンが望んだように恋人達は眼を開いて死を迎えるのである。ダン「行け」という言葉を弾丸のように使っている。第一連の最終行で作り出し女性に示す。第二連の冒頭で発射する。この間に二つの連を分ける果てしない沈黙が広がっており、その中で話者は自らを鋼のように硬くし、引き金を絞るのである。もちろん、全てはゲームである。銃は劇場の衣装戸棚にあって、ロミオもジュリエットもいつもそうであるように、結局は何事もなかったように立ち上がるのである。ロマンチックな悲劇やオペラのように華やかで害を及ぼさない表現形式を使って死を示すことによって死にながら生きている状況を作り出すのに役立つのが詩の特質である。また、自殺の空想を広げることでダンが生きていくのに役立つのもこの詩の特質であると信じることもできよう。自殺の練習は銃の発射の練習のように死ぬ機会を減らしてくれる。

「愛しい人よ」でダンは死の練習の必要性を感じていることはきわめて明確である。

愛しい人よ、僕が旅立つのは
 君に飽きたからではない。

また、この世のどこかにもっと素敵の人が
 いるかもしれないと思ったわけでもない。
 そうではなくて、いつかは
 死ななければならないのだから
 戯れに死のまねごとをし、
 死に慣れようと思うからだ。⁴⁹⁾

この詩は女性と別れる言い訳として約束を押し付けるのではなくて、死に慣れておきたいというダンの願いを説明しただけのものである。別れが事実上の別れではあっても戯れの別れになるのである。つまり死んだら別れなければならないのだから慣れておくのが「一番よい」のである。彼のいう別れは仮の自殺で、詩が進むにつれて自殺するにふさわしい静かな気品ある態度を取るようにと相手の女性を説得するのである。声をあげて泣くと不運が重なるだけだと警告する。誇り高い落着きがあってこそ運命に打ち勝つのだと相手にいう。これはストア学派の知識で、ダンはこのセネカの中に見たのであろう。同じようにセネカは文通者に死のリハーサルをするようにといている。「これを言うのはただ人に自由のリハーサルを示すためではない。死に方を学んだ人は欲望のとられ人になる方法を学んではいない。」⁵⁰⁾

-
- 1) W.B. イエーツ著『選集』第二版 1950年 264ページ
 - 2) T.S. エリオット著「不死のささやき」1-16行
 - 3) ローリー著『詩集』オックスフォード 1829年 第8巻 900ページ
 - 4) 『聖なる詩』9ページ
 - 5) 『聖なる詩』51ページ
 - 6) セネカ著『道徳に関する書簡』第54巻
 - 7) ゴス著 第1巻 191ページ
 - 8) 『説教集』第8巻 92ページ
 - 9) 『エレジー』49ページ
 - 10) 『エレジー』55ページ
 - 11) 『聖なる詩』8ページ
 - 12) 『聖なる詩』9ページ
 - 13) 『聖なる詩』7ページ
 - 14) 『危篤時における信心』44, 79ページ (瞑想 VII, XII)
 - 15) 『祝婚歌』55ページ
 - 16) 『祝婚歌』57ページ
 - 17) 『祝婚歌』41ページ
 - 18) 『自殺論』17-18ページ
 - 19) 『自殺論』47ページ
 - 20) S.E. スプロー著『ダンからヒュームまでの英国における自殺論争』ラサール イリノイ 1961年 及び A. アルヴァリズ著『残酷な神』1917年を参照
 - 21) アウグスチヌス著『神の街』第一巻 17-27ページ
 - 22) アクイナス著『神学大全』第二巻 第二章 Q.65, Art. 5
 - 23) 『自殺論』30ページ

- 24) スプロール著 前掲書 17ページ, M.エルウィン編 B.R.ヘイドン著『自叙伝と日記』1950年 650ページ
- 25) 『自殺論』32ページ
- 26) 『自殺論』178ページ
- 27) 『自殺論』30, 58, 72, 65ページ
- 28) R.L.シムズ訳 J.L.ボーヘイス著『他の宗教裁判所 1937-52年』1973年 89-92ページ
- 29) 『自殺論』189-191ページ
- 30) スプロール著 前掲書 62-65, 78-79ページ
- 31) ゴス著 第二巻 124ページ
- 32) ゴス著 第一巻 191ページ
- 33) J.A.スボールディング, ジョージ・シンプソン共訳 エミール・デュルクハイム著『自殺』ニューヨーク 1951年
- 34) 同上 279ページ
- 35) ゴス 第一巻 174ページ
- 36) ゴス 第一巻 191ページ
- 37) デュルクハイム著 前掲書 210ページ
- 38) 『神学論集』30ページ
- 39) 『危篤時における信心』88-89ページ (瞑想 XIV)
- 40) 『エレジー』81ページ
- 41) 『エレジー』70ページ
- 42) デュルクハイム著 前掲 271ページ
- 43) シンプソン著 262ページ
- 44) ボールド著 526ページ
- 45) 懐疑的な見解に関しては R.ウエレク, A.リベイルー編『文芸学における証拠』ヘレン・ガードナー著「セント・ポール大聖堂司祭長ダンの記念碑」オックフォード 1979年 29-44ページ参照
- 46) ボールド 530ページ
- 47) 『エレジー』62ページ
- 48) 『エレジー』36ページ
- 49) 『エレジー』31ページ
- 50) セネカ著『道徳に関する書簡』第26巻

(2007年12月5日 受理)